

いまどきの新・学芸員—採用の現状と未来

日 時：2012年4月28日（土）10:30～16:30（10:00 受付開始）

会 場：大阪大学会館アセンブリーホール（大阪府豊中市待兼山町 1-5 大阪大学内）

アクセス <https://55099zzwd.coop.osaka-u.ac.jp/daigaku-hall/files/access.html>

主 催：美術史学会、大阪大学文学研究科

後 援：全国美術館会議、日本アートマネジメント学会、文化資源学会

定 員：120名（美術史学会員以外の参加も可、参加無料、事前申込不要、先着順）

お問い合わせ：大阪大学文学研究科 芸術史講座 日本・東洋美術史研究室 TEL (06) 6850-5126（直通）

◎ 開催主旨

近年、美術館博物館の新・学芸員の採用において、任期制を導入したり、嘱託などの非常勤とするケースが多くなっています。逼迫した財政状況のなかで定員が確保できない、期間が定められた指定管理者制度の導入によりおのずから正規雇用が難しいなど、その背景は様々ではありませんが、学芸員の非正規雇用は今後ますます増加することが予想されます。美術館博物館のこれから、ひいては美術史学会の未来を担う新・学芸員採用のこうした動向は、決して是認できるものではありません。しかし、声高に異議をとなえるだけでは問題解決にはいたしません。学芸員の非正規雇用にあたっては、勤務形態、仕事内容、期限後の処遇といった悩ましい問題があり、採用する側もされる側も、双方が手探り状態にあるのが現状です。そこで、このシンポジウムでは、採用する側とされる側の双方からの報告により、まずは情報を共有し、実情を把握することを目指します。また、非正規雇用のデメリットだけでなく、メリットにも目を向けることで、新・学芸員の未来を展望したいと考えています。このシンポジウムが、新・学芸員を目指す方々、迎える方々、さらには送り出す方々にとって、有意義な場となることを期待しています。

プログラム

* 進行：北澤菜月（奈良国立博物館）

——＜開会・趣旨説明＞——

10:30 開会挨拶：根立研介（美術史学会西支部代表委員・京都大学）

10:40 趣旨説明：藤岡 穰（大阪大学）

第1部 新・学芸員採用の苦心（採用する側の事情）

10:50～11:20 報告1「東京国立博物館におけるアソシエイトフェローの雇用」島谷弘幸（東京国立博物館副館長）

11:20～11:50 報告2「大阪市のミュージアム事情」篠 雅廣（大阪市立美術館館長）

——＜昼休み＞——

13:00～13:20 美術館博物館委員会からの報告（時事的なこと）内田啓一（早稲田大学）

第2部 ステップ・アップした／する新・学芸員（採用される側の事情）

13:20～13:40 報告3「一人前の学芸員になりたくて—非常勤・任期付・常勤—」

植田彩芳子（京都文化博物館学芸員）

13:40～14:00 報告4「研究補佐員という仕事について」

小野尚子（国立国際美術館研究補佐員）

——＜休 憩＞——

14:15～14:35 報告5「限られた期間でやるべきこと、できること」

末兼俊彦（九州国立博物館アソシエイトフェロー）

14:35～14:55 報告6「任期付き採用期間中のキャリアアップについて —龍谷大学龍谷ミュージアムの事例」

村松加奈子（龍谷ミュージアム リサーチ・アシスタント）

——＜ティー・ブレイク＞——

15:20～16:20 パネル・ディスカッション

司 会：後藤文子（慶應義塾大学）

16:20 閉会挨拶：泉 武夫（東北大学）

——＜閉 会＞——

（※閉会后、大阪大学内で懇親会を予定しています）

島谷 弘幸 (しまたに ひろゆき)

【プロフィール】東京国立博物館副館長。学芸部美術課書跡室長、文化財部展示課長、学芸研究部長などを経て現職。専門は古筆学、日本書道史。『古筆学拾穂抄』(木耳社、1997年)、『文人の書(日本の美術504号)』(至文堂、2008年)、『和様の書(日本の美術519号)』(ぎょうせい、2009年)ほか。2003年特別展「西本願寺」、2006年特別展「書の至宝」、2008年特別展「宮廷のみやび - 近衛家1000年の至宝」ほか企画を担当。

【報告内容】東京国立博物館の所属する独立行政法人国立文化財機構では、2008年度よりアソシエイトフェローの雇用を始めた。独立行政法人となり人件費削減を迫られる中、事業費を財源にした新たな雇用形態である。アソシエイトフェローは任期が3年と定められているが、研究員職であり、研究員と一緒に学芸業務を行うことができ、人手不足の解消につながる。東京国立博物館では主に若い人材を中心にアソシエイトフェローとして雇用しており、学芸業務の経験を積んでもらうことで、彼等のステップアップに役立つようにつとめている。

篠 雅廣 (しの まさひろ)

【プロフィール】大阪市立美術館館長。1950年高知県生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学(西洋美術史学専攻)。福井県立美術館主査学芸員、西宮市大谷記念美術館学芸課長、京都市美術館学芸課長、高知県立美術館館長を経て2008年より現職。研究分野は、日本近代美術史、博物館学。2011年大阪市立美術館にて『生誕120周年 岸田劉生展』を企画した。

【報告内容】「業界」の方がたと顔をあわせるたび、枕詞のように「大阪は大変ですね、それでこれからどうなるのですか?」と、半ば揶揄が混じった質問ばかりをされて、「先の大戦で国が無くなっても美術館は残りましたから、なんとかかなるでしょう」と切り返す今日この頃です。とは言っても、「ミュージアムは続く」。このたびは、ガヴァナンスやマネジメント、オペレーションといった流行りの言葉を使いながら、まずは研究者としての学芸員を採用する苦心を、大阪市のミュージアムの「現況」と重ねながらお伝えしたいと思います。

植田 彩芳子 (うえだ さよこ)

【プロフィール】1998年東京大学卒。2010年東京大学大学院で博士号(文学)取得。2005年から2007年、国立新美術館(設立準備室)に研究補佐員として勤務。2008年から2010年、東京国立博物館特別展室に任期付研究員として勤務。2010年8月より京都文化博物館に学芸員として勤務。

【報告内容】国立新美術館の研究補佐員(非常勤、約3年間)として「日展100年展」「横山大観展」を担当し、東京国立博物館の任期付研究員(常勤、2年半)のときは特別展室という部署で、数々の大展覧会(「対決 巨匠たちの日本美術展」「皇室の名宝展」など)の手伝いをした後、現在、京都文化博物館に学芸員(常勤)として勤務して2年目になります。京都文化博物館では「日本画 きのう・京・あす展」などを開催、近代絵画を担当しています。個人的な経験ですが、それぞれの職場で経験した勤務形態、仕事内容をご紹介しますとともに、非正規雇用のメリット、デメリットについて考えたことをご報告させていただきたいと思います。

小野 尚子 (おの なおこ)

【プロフィール】1981年生まれ。大阪大学文学部、同大学大学院文学研究科で西洋美術史を専攻。研究テーマはアルフォンス・ムハの後半生における作品で、2006年から2年半ほどチェコ共和国カレル大学哲学部で調査研究を行う。2005年から伊丹市立美術館(兵庫県)で年間ボランティアを経験、2009年から国立国際美術館(大阪府)に研究補佐員として勤務。

【報告内容】国立国際美術館における研究補佐員としての勤務内容や経験を紹介し、学芸員を目指す者としての学びの現状を報告する。国立国際美術館の設けるさまざまな非常勤職のうち、発表者の就く研究補佐員は、学芸員に従って、所蔵品管理業務や展覧会開催に関わる業務を担当する。それは、書類の作成や作品の取り扱いといった基礎的な実務経験に止まらない。作家や来館者など館外との関係を築く方法や、他種補佐員、インターン、ボランティアとの連携など、美術館組織における仕事のしかたを肌で感じ取り、身につけていくことができる。美術館運営の現状に柔軟に対応できる学芸員や組織の在り方を明確に思い描くことが、経験をより実りあるものとするのではないだろうか。

末兼 俊彦 (すえかね としひこ)

【プロフィール】1978年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程中退。2010年7月より九州国立博物館学芸部文化財課のアソシエイトフェローとして金工・刀剣分野を担当。

【報告内容】非正規、非常勤雇用の問題が議論される社会状況の中、企業は即戦力となる人材を渴望する一方で、肝心の人材育成を独力で行えないという大きな自己矛盾と負の連鎖に陥っています。この傾向は我々博物館業界においても同様で、多くの博物館が対策に苦慮している問題ではないでしょうか。本報告では、私自身が体験した独立行政法人国立文化財機構におけるアソシエイトフェローという雇用のあり方をもとに、様々なマイナス要因ばかりが語られ、「その場しのぎ」のイメージが強い有期雇用について、キャリアアップと人材育成の肯定的な側面を紹介いたします。

村松 加奈子 (むらまつ かなこ)

【プロフィール】1979年生まれ。名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期満期退学(2009年9月)。2010年4月より龍谷大学龍谷ミュージアムのリサーチ・アシスタントに着任。主に日本の仏教美術の展示に関わる学芸業務と、ミュージアム教員の補助に携わる。専門は日本中世絵画史。

【報告内容】報告者は、大学院在籍中より日本中世の仏画を専門とし、研究活動とともに、自治体の市史・県史編さんの協力員として、文化財調査に携わってきた。現在は、2010年4月に開館した仏教総合博物館、龍谷大学龍谷ミュージアムのリサーチ・アシスタントとして勤務し、展示資料の調査研究、展示・撤収作業、集荷・返却等の業務に携わっている。現職はミュージアム内の研究プロジェクト(3カ年)に属する雇用枠であり、プロジェクト終了とともに任期終了となる。将来に対する不安は常にあるが、専門を最大限に活かせる現場で、数多くの現物資料に触れる機会を得て、論文執筆や口頭発表など、研究業績を伸ばすことができた。職場は新設の大学付属博物館であり、やや特殊な環境と言えようが、非正規雇用の在り方の一事例として、報告者の現状をお伝えしたい。